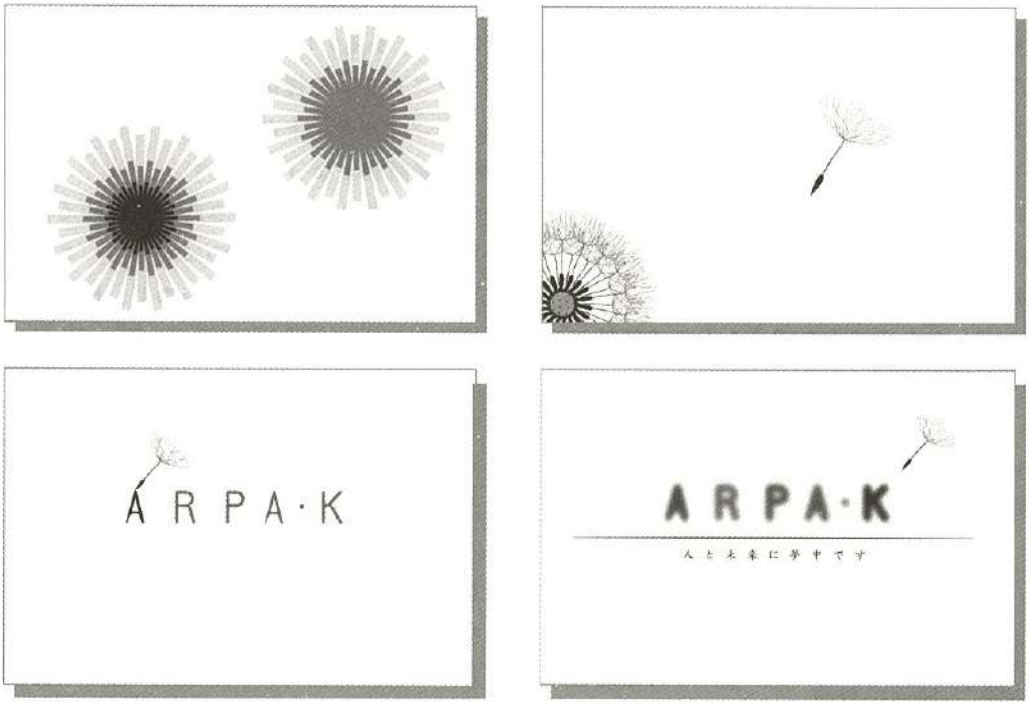
VOL.101
発行/5月1日

アルパック ニュースレター

ISSN 0918-1954



ホームページの動画イメージ

目次 contents

◇アルパックニュースレター座談会…… 2
◇未完の大器!?ブラジリア…… 7
◇第3回「京滋奈三・広域交流圏シンポジウム」を開催しました…… 10
◇八瀬野外保育センターが静かにリニューアルされます…… 11
◇新人紹介…… 12
◇所員一人ひとりの一口メッセージ…… 14
◇東京事務所が移転しました…… 20
◇メディア・ウォッチ…… 21
◇まちかど…… 22

アルパックニュースレター座談会

去る4月11日、京都事務所にて、宗田好史先生(京都府立大学人間環境学部助教授)、久先生(近畿大学理工学部土木工学科助教授)をお招きし、清水監査役(京都市ＯＢ)、三輪会長とともに、アルパックニュースレターへのご意見をお伺いしました。

ー本日は、宗田先生と久先生をお招きし、お二方にアルパックのニュースレターについてご意見をいただきたいと考えています。また、今回は100号の記念の座談会ですが、50号記念の時にご参加いただいた清水さんにもご参加いただき、三輪会長も含めて新旧合わせ、お話を伺いたいと思います。

アルパックの活性化を捉えた上で広報誌としての意味を問い直す

宗田／ニュースレターは10数年間読ませていただいていますが、新しい動き等、役に立つ記事が多いと思います。ただ、専門家の情報誌としては、17年の間に変わった部分と変わらない部分があります。変わった部分とは、取り扱う業務の目的そのもので、国土計画、地域計画、まちづくりの仕組み等です。万博の時代から大規模開発の時代を経て、現在の個別計画の策定に係わる事業や、有志で取り組まれているまちづくりの業務まで、情報中枢機能と専門家集団としてのアルパックは変わりませんが、そこに書くべき事は変わっています。したがって、ニュースレターも変わるべきだと思います。

特に気になるのは、この5～6年の間に、アルパックが力を入れて紹介していると思われる記事と、私が面白いと思う記事にずれを感じるようになったことです。この間の変化として、例えば、雑誌の「造景」は80年代には考えられなかった新しいスタイルで、今やあの種の情報が我々の関心を集めるようになっています。あるいは「ビオシティ」等の新しいライフスタイルを提供する雑誌やタウン誌等も、コンサルタントが新しいネタを仕入れるための必読書となっています。

つまり、まちづくりの専門家が求める情報のレンジが広がって来たのに対して、ニュースレターの記事は変わらないので、構えている部分と新鮮さを感じる部分にずれが生じていると思われます。だからこそ、ニュースレターも変わる必要があると思うのです。実は、ニュースレターよりもアルパックがどう変わるかということに関心を持っています。三輪さん～金井さん、次の世代には山口さんたち、そして現場には20代後半の若いスタッフがいますが、明らかに三つの世代の間には、専門家としての資質の変化まで指摘しなければならないような変質が起こっています。それは専門家のサラリーマン化と言えるかもしれませんし、アルパックの会社化と言えるかもしれません。そのために、将来、アルパックが三輪さん、金井さんを失った時にどういう方向に進むのか、非常に気になるわけです。

ですから、アルパック自体の活性化を捉えた上で、次世代、次々世代の人たちが元気に発言でき、新しいネタを上手に発信できる場を提供する、あるいはまちづくりの最前線を発信する一番ホットなネタとなる雑誌にするという、この二つは切り離して考えられないと思います。今のアルパックを活性化するために、広報誌の意味について、もう一度捉え直すべきではないでしょうか。

三輪／我々の仕事は、常に新しいことにチャレンジすることが生命です。以前、雑誌の創刊号を集めてトレンドを見ていましたが、マス

メディアは多彩に変化していますので、一つに閉じ込めるのは無理な気もします。

宗田／逆に、その新しさを読者は求めています。特にアルパックという会社の職の専門性から求めるものはそこにあるわけです。

5時以降のキャラクターを生かして新しい活力を生み出す

久／ニュースレターは、それぞれの所員が自分の声で発言しているところが面白いですね。海外旅行の話や、趣味の話、「書評紹介」「まちかど」の文章の中にもその人のキャラクターを見ることができます。

それを見ますと、9時～5時の仕事の間と5時以降ではキャラクターが変わる人が多いようで、私は5時以降のキャラクターに興味がありますが、まちづくりにもそれが重要です。特に若い人は、5時までの印象とニュースレターの記事の印象が違うのですが、それだけのパワーと面白いキャラクターを、何故9時～5時の仕事に生かせないのかと感じます(笑)。そして、数十年後を考えますと、若い人たちの記事に現れているパワーを9時～5時の仕事にストレートに出せるかどうかがこれからのアルパック、あるいはニュースレターの行く末を決める鍵になると思われます。その延長上で言えば、「造景」に載っているようなオフィシャルな情報はどこでも見られますので、裏情報がどれだけ載っているかという点がポイントではないでしょうか。例えば、都市計画の仕事で、苦労話や裏話がニュースレターに掲載されている時があり、それを併せて読むと報告書がより納得できます。建築の紹介も、ニュースレターには設計者の生の声や苦労話、制作の意図などの思いが現れている場合があり、興味を持って読んでいます。

したがって、これからのニュースレターに、オフィシャルではない情報や裏情報などを伝えていただけることを期待しています。

宗田／9時～5時と5時以降という分け方は面白いですね。それを世代論で説明しますと、京都事務所の場合、まず三輪さん、金井さん等の第一世代、山口さん、石本さんの第二世代、高野さんや石井さんの第三世代と、明らかに三つの世代があります。

9時～5時と5時以降が完全に一致しているのが第一世代で、余暇も仕事に関することをする、仕事が面白くて仕方がない世代です。第二世代はややずれが発生して、プライベートで行う事と会社の仕事を区別し、あるいは中間を狙って活動を始めながら、両面を先輩たちがしたような形にしようという一つの像を苦しみながら持っています。それに比べて、第三世代は、ずれがあって当たり前という世代で(笑)、余暇の部分を仕事に生かすという発想もなく、逆に上手に割り切っています。ですから、ニュースレターで彼らの本音が語られていると、いつも会っている人の意外な面を見つけて驚くわけです。そう考えますと、実は、第三世代の5時以降に、アルパックが本来持っていながら使い切っていないエネルギーがあると思われます。

また、セクレタリーやアシスタントの女性も仕事を手伝いながらまちづくりに関心を持ち、フリーで我々のイベントに来て意見を出してくれたりします。そのエネルギーも無視できないのですが、アルパックはオフィシャルなところでその力を生かしきれていないと思います。

そういう意味で、9時～5時とそれ以外の関係が変わってきたのが年代のギャップであり、それを整理すると新しい活力が生まれてくる可能性も秘められていると思います。

三輪／発注者の方にも、ワークショップ型のソフトな部分と、土木型コンサルタントのようなハードな部分の二種類があると思います。

宗田／ただ、土木系コンサルタントですら中

心市街地活性化まちづくりに流れ込んでいる業界の流れの中で、アルパックがアルパックである所以として「どこよりも一番柔らかい」と発信するスタンスは大事にしてほしいですね。

久／アルパックの今の集団を一言で表すと、まさに「器用」だと思います。これは良い意味でも、悪い意味でもあるのですが、どういう仕事でもこなせるということは、自身の優秀さもある一方、事務所にノウハウやストックがあるために、それを使えばそれなりの仕事ができるということを意味しています。

ところが、それが必ずしも評判が良いわけではありません。アルパックが初動期に公団と一緒に悩んだような仕事の仕方が、最近、特にまちづくり系で増えており、30代、40代の若い行政職員たちが悩みながら取り組んでいます。そこに、アルパックのように器用な人たちが出て来ると、自治体職員が仕事に対する温度差を感じてしまう場合が出てくる可能性があります。そうしますと、今熱くなっている30代前後の行政職の人たちが40代、50代になった時に、今、彼らがしている方法が行政の仕事の仕方としてメジャーになると、一緒に歩んできた他のコンサルタントが重宝されることになるのではないかと懸念されます。そういう過渡期の辛さがアルパック自体にもありますし、世の中全体の中で、アルパックが変わるに変われないという中途半端な状況にあるのではないかと思います。

“女性や子ども”のまちづくりの時代にどう対応するか

宗田／急速な変化の中で、今やまちづくりは“女性や子ども”が主人公になったところがあります。しかし、それほど柔らかくなったまちづくりに、この集団がどう対応するかというのは非常に難しい問題です。大阪のアメリカ村にいる若者たちと同じ感性を持って語れる人がアルパックにいるかというと、そこまでは器用ではありません。その新しい器用さをどう培うかが、今求められているのです。

言い替えると、アルパックという会社組織がまちづくりコンサルタントとして対応できないほど、まちづくりが変わってきたと言えるかもしれません。それをしのぐためには、やはり、セクレタリーやアシスタントの女性、若い人のエネルギーを最大限に活用し、そういう人たちを前面に出していくべきです。

久／アルパックニュースレターは、実は内部対内部の重要な情報源であり、三世代間の交換日記ではないかと思います(笑)。若い人たちは上の人たちの考えをニュースレターで確認し、逆に上の人たちは若い人たちの感性を確認して、その上で次の展開が出てくる。そういう意味では、事務職や技術職に関わらずそれらをうまくミックスしていく仕事の仕方ができると面白いですね。

宗田／思い切って、まちづくりに関心を持っている“女性や子ども”にまちづくりを柔らかく語ることもできるのではないでしょうか。姉小路や伏見のまちづくりで出している通信はまだ全国の読者をとらえるほどではありませんが(笑)、アルパックが出せば、“女性や子ども”が見て役に立ち、かつ面白いものができるかもしれません。「造景」や「学芸出版社」の一流の編集者は「今のまちづくり本は、関心を持っている女性や子どもが手に取って買いたくなるような編集が必要」と言っています。そのためには美しい絵、カラフルな図、心に響く見出し等が必要ですが、内容は硬くても、そのような編集作業によって現代に即した方法が取れるかもしれません。“女性や子ども”が街の主人公として活躍する場という戦略を持つ

のであれば、そのくらいのことはチャレンジしても良いと思います。アルパックでなければできない、新しいまちづくりのための情報発信の方法には、この位の転換を求めても良いのではないでしょうか。

清水／社内で“女性や子ども”の組合せをどうするかが、編集長の悩むところだと思います。50号記念号の時に「追跡！あの記事は今･･･」という記事がありました。若い人たちがそれぞれ数人のチームを組み、セクレタリーの人たちも入って報告を書きましたので、読者の中にも「総務の人も携わっているのか」という反応が目立ちました。あのような方法があるのではないでしょうか。

昨年、一昨年の読者アンケートから読者の反応を整理したところ、苦労話や若い人の意見が高い評価を得ていることがわかりました。これから目指すものについても、「住民主体の地域づくりの成功例や問題点」、「福祉のまちづくり」の記事を希望する声が多く寄せられています。ただ、ニュースレターで一般市民を対象にするのは無理ですので、別のツールが必要です。それができると素晴らしいと思いますね。

ホームページの双方向性を生かし、「まちづくり掲示板」で生きた情報を拾う

ー今、ホームページを作成準備中ですが、ホームページは一般の人も見ますから、情報の混乱があると思います。したがって“女性や子ども”も含めたまちづくりのうねりをキャッチして情報発信しなければなりませんね。

宗田／専門家や行政職員が知りたい情報は、もはや専門技術ではなく、まちづくりをする上で接する一般の人がどのような感性を持って暮らしているかという情報や、裏情報など“女性や子ども”と話す時に使えるネタです。

久／しかし、現場の情報を載せるには、裏情報には書けない部分もありますから、現場の名前を隠して一般的なまちづくりの情報として提供するようなテクニックも必要です。ホームページについては、一般市民はアルパックの名前さえ知らないので、アクセスする確率は極めて低いと思います。したがって、一般市民にアルパックを認知させ、ホームページにアクセスさせるためには別の工夫が必要です。また、作り手の意識の中には「こちらから情報をオープンにする」という形が思い描かれていると思いますが、インターネットの世界では、人々は受信する以上に発信したがっていますから、そういう人たちのフォーラムの場として「まちづくり掲示板」がアルパックのホームページにあれば、色々な人たちが情報交換できますし、その情報をアルパックが受信して財産にすることも可能です。もう一つ、市民まちづくりにおけるアルパックの認知度を上げるためには、市民グループとリンクすることも重要です。それによって信頼を得たり、あるいはその市民グループのホームページからアルパックへ飛んで来ることもできます。これからのまちづくりホームページにはそういう工夫が必要です。

宗田／また、アルパックにはコンピュータの得意な人材もいますので、まだホームページを立ち上げていない自治体から仕事を受けて、メンテナンスをしながら、リンクを張ることも考えられます。実はその方法で、学芸出版社のホームページはまちづくりのチャットになりつつあります。京都におけるまちづくり関係には全て広がっていて、まちづくり本の情報も載っていますし、さらに全国各地のまちづくりにもつながっています。つまり、まちづくりの専門書に特化して、それにふさわ

しいホームページのあり方ができ上がっているわけです。そのように、ホームページの中にまちづくりについて発信したい人たちを吸収する仕組みを作れば、まちづくりの裏情報で現場の部分を匿名にしなくても、本人が発信する分はチャットでそのまま見せることができます。やはり、情報化社会の中で、いかにリンクを張り巡らすことができるかがポイントです。

若い力と、ホームページを活用し新しい形で情報を受発信する

ーホームページの作成は若い人たちが自発的に担当しています。そのエネルギーはしだいに上を巻き込んでいくような予感がします。

宗田／若い力を生かすことが、この会社は構造的に苦手だということを自覚される必要があると思います。それは、アルパックが、三輪さんたちが若い頃に始めた会社で、三輪さんたちの上には先輩がいなかったため、ご自分が今の若い人にとって近寄りがたい大会長であることを、大会長の下で働いたことのない三輪さんは体験的に知らないからです。

三輪／万博会場計画の時、私は35歳でしたが、コンサルタントもシンクタンクもなかった頃で、だからこそできた面もあります。丹下先生、西山先生といった大先生たちも当時はコンサルタントがどうあるべきかを知らず、予算と仕事を自由に任せてくれました。

久／とは言いながら、アルパックは組織的にいまだ固まっていないので、大手土木コンサルタントのように組織化しようと思えばそれなりに仕事はできますが、そうなればそういう仕事しかできなくなります。そうではなく、もう一度原点を取り戻そうという方向も考えられます。

三輪／市民、住民も賢くなっていますので、そこに先生方の役割もあるわけです。

ー確かに、若い人たちをどう生かすかということについてセンスもノウハウも弱いと思いますので、ニュースレターを編集しながら、本当に若い人の声が聞こえているかどうか、反省しなければなりませんね。

宗田／若い人たちに、どのようなニュースレターで、どのような情報を発信したいかということを聞くべきだと思います。

逆に、若い人に編集させて、どのくらい新しいことができるか、試してみるのも面白いかもしれません。そうすると違いがわかりますから、そういうところで若い力を活用することにチャレンジしていただきたいですね。

久／その点で、ホームページを若い人たちに任せたのは一つのチャレンジですね。

宗田／若い人たちでなければできません(笑)。しかもホームページはどんどんゲリラ化するので、干渉しようとしても潰せません。

ー双方向になった時にどう対応していくのでしょうか。

宗田／双方向性を否定すると、まちづくりでは仕事ができません。フォーラムやシンポジウム、あるいは市民参加型のイベントとしてグランドビジョンの公開討論会等をアルパックが演出する場合、その反応を、プロも素人も含めてホームページに寄せてもらうことは重要です。それが集まると良いネタになりますから、それで報告書を作ると、そこから仕事が生まれる可能性もあるわけです。

—情報誌にとって変化の時代を予感し、不安もありましたが、本日のお話を伺って、乗り切るエネルギーが湧いてきたような気がします。本日は、どうも有り難うございました。

未完の大器!?～ブラジリア

〔大阪事務所／堀口　浩司〕

ブラジリアは都市のスケールの大きさや生活関連機能の不十分さなどから、建設当初から国内外の専門家からは評判の良くない都市の代表となっています。しかし都市として成熟化のプロセスにあり、首都建設は今も進行中でした。

ブラジルといえば熱帯雨林をイメージしますが、ブラジリアは高原で非常に乾燥した地域にあり、湿度を上げるための多目的なダム湖を持っています。また、アマゾン川、パラナ川、サンフランシスコ川のブラジル3大河川の分水嶺周辺の馬の背状の場所にダムをつくり、その丘陵部に新首都を建設して、そのスケールの大きさや幾何学的な街区形成によって知られています。現在のブラジリアの規模は、5,814平方km、177万8000人(1995年推計)、人口密度は3.06人/haです。

ブラジリアへの首都移転

ブラジルの地域発展は大西洋に面した臨海部に限られており、内陸部の発展を推進し、国土の均衡ある発展とブラジル経済の成長を促すことを目的として首都移転が実施されました。

事業はクビチェク大統領の選挙公約によって促進されました。

1948年　新首都建設予定地を選定

1955年　建設対象地の境界線を決定

1957年　都市設計コンペを実施

国内の専門家を対象としてパイロット・プランコンクールが実施され、中心部が飛行機

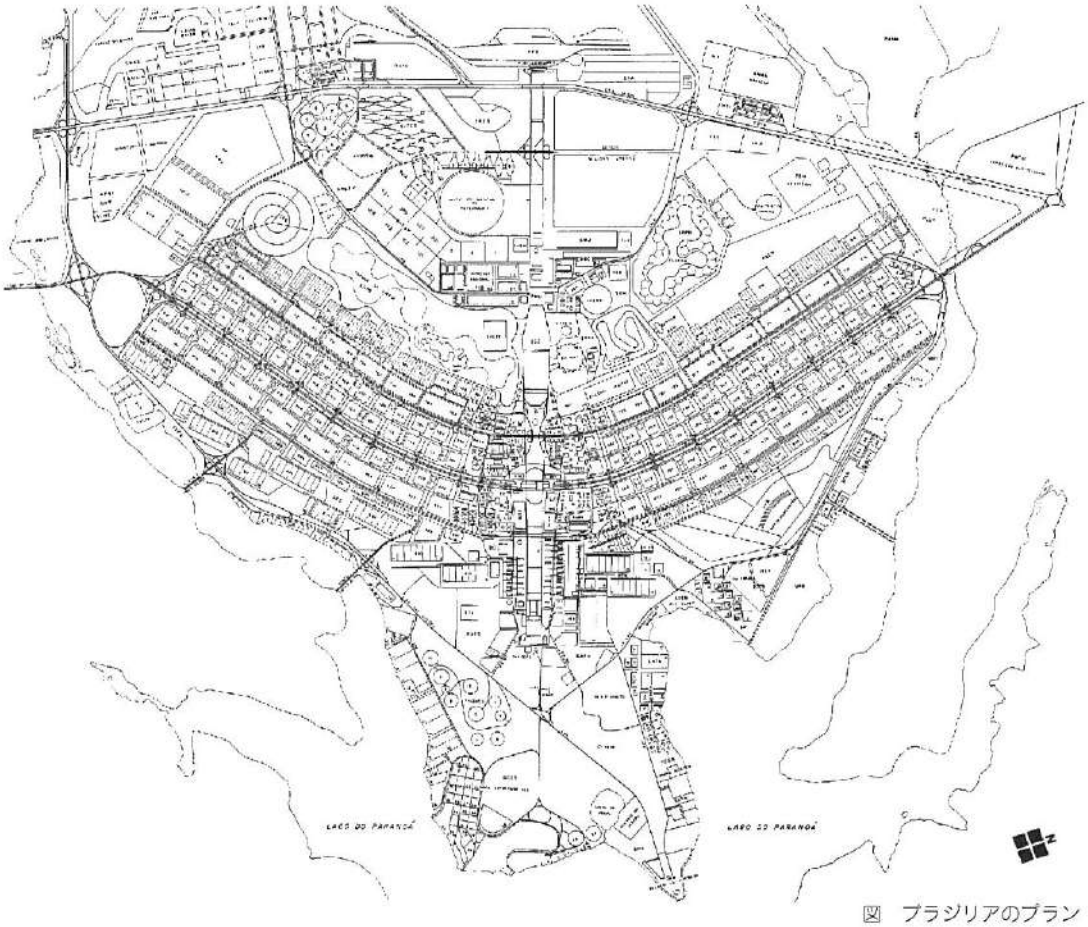


図　ブラジリアのプラン

国会議事堂

ブラジリアの中央官庁市街
象徴的な空間構成であるが表情は単調

の形状をしたルシオ・コスタの案が当選しました。

このプランは、ル・コルビュジェの「輝く都市」のイメージを具現化しようとしたプランであり、モータリゼーションの到来を予見したヒエラルカルな道路網とモダニズムの都市デザインを標榜しています。

有名な話ですが、南北8kmにわたる幹線道路（胴体部分）に沿って行政施設・文化・レクリェーション施設を、翼の部分に行政職員のための住宅を配置したプランになっています。国会議事堂、大統領府、最高裁判所など国権の最高権威は胴体の先頭部分に配置されています。

1956年 新連邦首都市街地建設公社（NOVAP）設立

1960年 首都移転を実施

都市の建設にあたっては、公社を規定する法律の中で土地収用法と類似の内容も定めています。この際、ゴイヤス州政府は、連邦区内及び隣接地区に含まれる土地の一切の譲渡を禁止しています。

1960年にリオデジャネイロからブラジリアに首都が移転した当時は、都市の生活基盤が貧弱で、高級官僚は週末になるとリオデジャネイロに帰る、金帰月来の生活を送っていたようです。

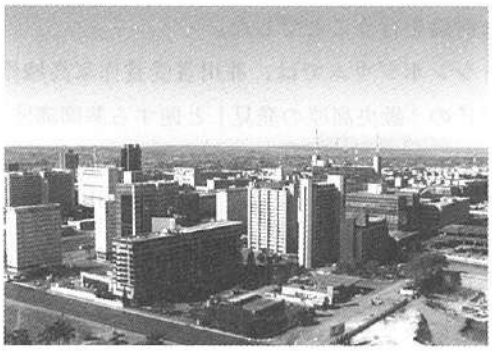
しかし、その後ブラジリアの人口増加は著しく、1977年には郊外に衛星都市を建設するプラン（PEOT）を策定し、都市圏の開発計画としました。当初の計画人口は2000年に50万人規模ということでしたが、都市圏人口は既に200万人規模に発展しています。

都市の成熟化へのプロセス

行ってみると、意外とまちらしくなって来ているなという印象です。これまでの風評では人工的でスケールアウトしており、都市の魅力に欠ける、なんとも面白くないところというのが通説でした。

確かに首都としての魅力は不足していますが、せいぜい40年の歴史しかないニュータウンの宿命と思えば、納得のゆくところです。実際、今なお都心部に空き地があり、その荒涼とした雰囲気もあって、ヒューマンスケールを感じにくい都市です。

都市中心部の官公庁地区は、明快で非常に象徴的な施設配置がなされており、建築家的都市プランナーであるルシオ・コスタが、ル・コルビュジェのアイデアを忠実に実現しようとしています。施設の将来への拡張性はあるかもしれませんが、空間構造は極めて単調です。また、前回(99号)紹介したクリチバがモダンアメリカ的な雰囲気をもっているのに対して、ブラジリアは権威的、かつ貴族趣味的な雰囲気を感じさせるまちです。クリチバが都



民間企業地区

フリーマーケット
この日は日曜日。中央部テレビ塔の足下で開催される。

市計画家出身の市長や行政プランナーが中心に計画を積み上げていったのに対して、ブラジリアは建築家のコンセプトを都市スケールに引き延ばしたところが、その大きな違いとなっています。

首都はなぜ移転したか

前の首都であるリオデジャネイロは自然の良港となだらかに起伏する背後地をもった都市です。地形的条件の良さと、新大陸ののびやかさとヨーロッパの都市の雰囲気を併せもつ非常に魅力的な都市です。ここはサトウキビとコーヒーのプランテーション経営により蓄積した富によって、ヨーロッパから最新(当時の)文化を輸入し、新大陸の都市文化が発展してきたところです。

ブラジルは16世紀以降、ポルトガル人がアメリカ先住民とアフリカからの黒人奴隷を労働力にして、白人を頂点とした社会階層をつくりつつありました。19世紀になってポルトガルから独立、1945年に民主的な憲法を制定しましたが、20年後の1964年の軍事クーデターにより軍事政権になりました。その後、1985年に民政が復活しました。首都移転は第2次世界大戦後、民主政権下の20年の間に実施されてます。

首都移転は、それまで大西洋岸に主要な都市が集まり、国土の中央部が低利用なため、均衡ある発展のために移転したことになっています。

しかし、単なる開発期待の移転よりも、もっと深い権力構造の変化のような潮流も見逃せません。第2次世界大戦後、ブラジルの産業近代化とともにその民主化が大きな課題でした。白人と先住民や黒人、さらに日本人など移民社会の人種的融合をすすめ、既存の経済支配や官僚システムを解体してゆくことが必要でした。

クビチェク大統領は大統領選挙の公約の一つに、それまで憲法に定めていた首都移転の実施を掲げ当選しました。クビチェクはチェコスロバキア出身で、白人社会の中では遅れて入植してきた組でした。ベロオリゾンテ大学を卒業後、医者から政治家に転身し、最終的に大統領になりました。コーヒー貴族と呼ばれる財閥的な家系でもなく、その政治的手腕で権力構造を再構築していきました。戦後民主化の潮流の中で、既存の富と権力が集中するリオデジャネイロを離れ、周辺には何もない大平原のまっただ中に新しい首都を建設しました。そのこと自体に移転の意味を見いだすことができるのです。

http://www.wombat.or.jp/horiguchi-kouji/BR_HOME.htmにも詳細な報告があります。

第３回「京滋奈三・広域交流圏シンポジウム」を開催しました

〔京都事務所／山口　繁雄〕

「京滋奈三・広域交流圏」という名称は、皆様にはあまり馴染みがないかもしれませんが、「首都機能移転候補地」の一つとして脚光を浴びている「畿央高原地域」を含む圏域といえば理解して頂けるかと思います。

当圏域は、東西方向の国土主軸と南北方向の日本を代表する歴史文化軸の交わる圏域であることから、昭和46年よりその新たな役割を巡って地元経済界で検討が進められてきました。京滋奈三・広域交流圏のビジョンづくりは、そうした地元経済界の研究成果を受けて、京都府、滋賀県、奈良県、三重県及び京都市の５府県市と同圏域内各地域の商工会議所や経済同友会によって構成された官民合同型の研究会によって平成８年度から進められ、平成10年度には「ビジョン」の公表が行われています。

ビジョンでは、京滋奈三・広域交流圏の目標を「日本の新文化創造エリアの形成－21世紀の文化経済型産業と生活提案圏域づくりをめざす－」と設定されています。

その意図するところは、明治期以来の西欧型近代化が成熟段階を迎えて、新しい発想での国づくりが求められている我が国において、当圏域の持つ歴史・文化蓄積や伝統産業やハイテク産業の集積、豊かな自然環境等をベースにしながら、相応の役割を果たしていこうというものです。

今回の第３回シンポジウムは、第１回目の京都、第２回目の滋賀に続いて、３月29日に奈良（於「奈良市ならまちセンター」）で開催致しました。参加者は200名を少し超えるものでした。開催の目的は、当圏域のビジョンを実現化していくために検討を進めてきた「行動指針（案）」を推進していくにあたって、「今、われわれは何をなすべきか」をテーマに活発な討論を行うことでした。

シンポジウムでは、芥川賞受賞作家高城修三氏の「畿央高原の発見」と題する基調講演、「京滋奈三・広域交流圏の形成をめざして－今、我われは何をなすべきか」と題するパネルディスカッションが行われました。

パネルディスカッションのメンバーは、コーディネーターが宗田好史氏(京都府立大学助教授)、パネリストは基調講演の高城修三氏、上原恵美氏（滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール副館長）、千田稔氏（国際日本文化研究センター教授）の３名でした。

基調講演ならびにディスカッションでは、「日本の新文化創造エリア」として位置づけられた当圏域の果たすべき役割の再認識が行われるとともに、「行動指針（案）」の中で命名されている当圏域の通称案「畿央の杜」についての評価と今後の「杜」づくりのあり方や具体的な交流施策案について、活発な討論が展開されました。

この討論を受けて、近く「行動指針」の公表と具体的な広域交流の取り組みが開始されていくものと思いますが、「ベイエリア」とともに近畿圏の活性化に寄与していくことができればと考えているところです。

八瀬野外保育センターが静かにリニューアルされます

〔京都事務所／前田　怜嗣〕

(社)京都市保育園連盟の八瀬野外保育センターが京都市内の民間保育園の園長達の思いをうけて命をあたえられてから30年を迎えます。このたび、1981年以来の大きなリニューアルが行われることとなり、そのご報告をさせて頂きます。

同センターとは私共も三輪会長を始め、設立時より携わって参り、関係した所員も沢山おります。先生方と池を掘ったり、法面に植栽を一緒に植えたりと建築以外のことでも顔をつっこみ、所内には先輩所員の色々な伝説が残っております。

同センターは、京都の左京区東北、『釜風呂』で有名な八瀬にあります。『京都市内の子ども達にも、ふるさとの山を』というコンセプトで、子ども達が自然とふれあえ、創造のよろこびと人間のつながりを満たすことができる場所として、森の中で日帰り保育とお泊まり保育などができる施設環境として徐々に整備されてきました（幼稚園も受け入れています）。同センターは京都の民間保育園（219園）の共有の財産となっております。

昔の同センターの紀要を紐解きますと、30年近く前の１枚の写真が目に入ります。それは、私よりも少し若い先生方が、囲炉裏を囲んで「これからの八瀬をどうしようか」と白熱した議論が伝わってくる写真です。その様子が伝わってき、胸に熱いものを感じます。今回は当時の若い先生方と今の若い先生方（親子程年がはなれている）との合同でリニューアルの計画がたてられました。

誇れるもの

京都には、『知る人ぞ知る日本が誇れるもの』というものが数多くあります。八瀬野外保育センターもその一つだと思います。派手で、きらびやかなものではありませんが、確実に保育の本質的なものを捉えながら、息ながくつづけられております。

・趣意；現場の園長達の「幼児に土と緑」という素朴な思い
・実現への過程；公私各方面からの協働
・持続；先生方や関係者の「奉仕のこころ」でオープンしてから30年経過
・精神と施設内容の合致；土と緑がこどもの遊び道具

どれをとっても、お仕着せから始められたものでないだけに、各人の愛情がつまったものとなっています。

また、各地で同様の施設環境を整備しようと試みられておりますが、どれもまともに成功していないように思います。それは、一言でいうならば、動機・思いのある人々と施設環境・管理運営が八瀬のように旨くかみ合わないからだと思います。

このようなことからも、同センターの機能保持の為の整備と、時代の要請に応えるための機能拡充との２つがリニューアルの柱となりました。

間口狭く奥行き深くから

同センターでは、子どもの安全と、山とその自然を守るためにむやみな入山や自由な立ち入りを制限しています。これが、近年できたテーマパーク的な山の家や子どもの施設と大きく違います。

今回の計画は、１日の受け入れ総人数をチェックしながら、１日の受け入れ園（現在は日帰り３ヶ園、お泊まり２ヶ園）を増やすことも可能なようにすること。現在は子どもだけの受け入れですが、子どもと保護者対象のプログラムの実行も可能なようにすること。山を荒らさないように、施設の拡充はできるだけ行わないことを基本的考えとしました。

図出典:八瀬野外保育センター紀要　(社)京都市保育園連盟

それらの諸条件を満たすために、今回、一番古い、「ひいらぎの家」を多層化しリニューアルすることとし、可能な限り機能保持のための営繕的な工事を今後続けて行う予定です。

森の中にいさせてもらう

新しい「ひいらぎの家」は森の中の屋根です。機能的には、従来の「ひいらぎの家」の機能が引き継がれ、センターに来られた園のベースキャンプ的なものになります。こんどの「ひいらぎの家」もまた、森にいさせてもらう、そんな感じです。「ひいらぎの家」は生まれ変わって来年早々にオープン予定です。

新人紹介

新たな環境の中で

〔名古屋事務所／天池　さとみ〕

昨年9月より研修生として名古屋事務所でお世話になり、今年4月から正式にアルパックの一員となりました天池さとみと申します。どうぞよろしくお願いします。

名古屋事務所があるナディアパークビジネスセンタービルの13階の窓から見下ろす市内の景色はとても素晴らしいものです。この景色の中に実際に目に見えるものから見えないものまで、私たちの暮らしの身近な所でアルパックの仲間が今までに係わってきた仕事がいくつもあるのだなと思うとついつい嬉しくなります。

これまで私は、都市計画という分野について特別の知識を持っていませんでした。アルパックは、地域の皆さんとともに考え、よりよいまちづくりを進めていくことを基本にしていると理解しています。アルパックで仕事を始めてから、仕事内容に興味を持つとともに、プランナーとしての高い志に共感しています。私は自分にできる事でこの会社に携わることができればと思い、この度縁があって、総務として加わることができ、とても嬉しく思っています。

現在は会社の経費の流れや原価管理等、仕事全体を通して経理の意味を勉強させて頂いています。そのため今までに経験した以上に責任のある仕事が多いと感じています。

今後はみなさんの信頼を得られるように一層努力し、アルパックにとってなくてはならぬ人になりたいと考えています。枠にとらわれることなく、スポンジのように周りのものを吸収し、自分の幅を広げ、充実した毎日を過ごしたいと思っています。

ジムカーナの教訓を活かして

〔大阪事務所／澤田　英郎〕

今年4月からアルパックの一員となりました澤田です。よろしくお願いします。

皆さん、ジムカーナというモータースポーツをご存じですか？ジムカーナとは、スポーツランドなどにあり一周1分30秒に満たないコースを自動車が順番に単独走行し、タイムを競う競技です。数回の草ジムカーナの経験上、ジムカーナにおいてタイムを縮める秘訣は、研究と練習、経験、情熱と落ち着きと感じています。

速く走るには、マシンやコースの特性について研究が不可欠で、練習によって研究の成果を活かすことが必要です。大事なのは、「研究と練習」は、コンビネーションであり、単品では片手落ちだという事です。「経験」は、言うまでもありません。続いて、「情熱と落ち着き」です。自分が走る2分前には、第1コーナーのブレーキポイントはここだ！などと冷静に分析していても、実際に走れば、興奮で頭がパニックになり、多くのミスを犯します。逆に始めから冷静なマシンコントロールを心がけて走ればミスは減りますが、確実にタイムは遅くなります。アドレナリン沸々の情熱とゴルゴ13の落ち着きを併せ持つことが重要です。

「研究と練習」「経験」「情熱と落ち着き」は、仕事にも共通すると思います。『まちづくり』において、様々な研究を行い、それを委託者や住民に公表し、助言を受け、再び研究することを繰り返すことによって、知識と経験を深める。その際、主観性を持つ情熱と客観性を持つ落ち着きで、研究を行い、委託者や住民と議論を交わす。そして、自分と委託者、住民の思いで築かれた「理念」を中心に明日のまちを創造する。このスタンスが私の目標であり、そうあるべきだと思っています。

はじめまして

〔大阪事務所／住田　純子〕

4月から、新入社員として大阪事務所でお世話になっています住田純子と申します。よろしくお願いします。早く仕事を覚える為に昨年の9月からアルバイトとして来させていただいていたのですが、まだまだ戦力になるにはほど遠く、アシスタントとしてもやっとなのが現状です。やっと所員の名前を覚え、電話も聞き取れるようになってきたところです。けれど、まだまだ失敗も多いと思います。早く覚えようと必死で頑張っていますが、皆様にもいろいろ迷惑をかけるでしょう。どうか、大きな心で見守っていて下されば幸いです。駄目なところは、どんどん言って下さい。

志望していた就職先は総務では無かったのですが縁あってアルパックの方でお世話になることになりました。建設コンサルタントという言葉自体、初耳に近いぐらい解らないことだらけなのです。自分の働いている会社が社会の中でどの様な立場にいるのかをもう少し理解したいと思っています。アルパックの所員は、自分の仕事に誇りを持った人ばかりなので、総務として張り切ってアシストしたいと思っております。

大学では、会計を中心に経営情報を勉強してきました。その中でも、簿記に興味がありました。総務で働くことになり、実践で役立てられることを楽しみにしていたのですが、実際の業務を経験するとその違いに戸惑うことがとても多いです。

早く仕事を覚え、頑張りたいと思います。

これから

〔名古屋事務所／間瀬　高歩〕

最近しばしば「あなたのこれまでの代表作・仕事は何ですか？」と尋ねられる。昔を思い返してみてもどれも代表作とまでいえる内容ではないので「これからの仕事が私の代表作となるはずです」と答えるようにしている。

私が名城大学を卒業したのは28歳。愛知県立芸術大学でデザインを学び、勤めていた建築設計事務所を退社したとき、今後の充電のためにと名城大学建築学科Ⅱ部に入学した。アルパック名古屋事務所に所属したのもほぼ同時期になる。

「働きながら学ぶことは大変だが、その後に必ず成果が出るから頑張れよ」自分が分かっていても一度目の大学生活とは状況が違うものだと、恩師や仲間が励ましてくれた。ただ、私はたとえ卒業ができなくても自分が学びたいことと、その活動が今後に繋がってゆけばそれで十分だと思った。社会に出た後に再び大学で学ぶと大学での収穫はむしろ大きくなるというのがこのときの発見だ。それは以前より学ぶことに対する意欲は強くなっているし、なにを学びたいかという目的もはっきりしているからだろう。私の場合も学びたいことや活動目的が明確であったから、大学での充電期間が多くの人との交流に繋がった。

写真：左から澤田、永濱、間瀬、天池、住田

充電期間が長かった私は昔の仕事を語るほどのキャリアもあまりなく、なんとか良い仕事にしようと精一杯の毎日を楽しんでいる。とりもなおさず、こんな新人には「これから先どんな仕事が、あなたの代表作になりそうですか？」と夢のある尋ね方をしていただけるようお願いしたい。

所員一人ひとりの一口メッセージ～その2

「21世紀へ向けて」と言う程ではないけれど

安藤　謙（名古屋事務所）

最近、土日はもっぱらボランティア。いま住んでいるやきものの町瀬戸で、瀬戸らしいまちや店をつくろうと、あっちこっちと人の間を渡り歩き波風を立てています。浮いた話だけでなくようやく人の顔が見えてきたところ。

住む人の顔が見えるまちづくりを

池田　さちよ(大阪事務所)

その街に住んでいる人の顔が見える、まちの姿が思い浮かぶような、そしてそこに住む子ども達が活き活きと過ごし、思い出をいっぱい抱えて明るい社会の担い手になっていけるような計画づくりのお手伝いができればと願っています。

気がつけば

石井　努（京都事務所）

子どもの頃空想していたものとは随分違いますが、21世紀がやってこようとしています。喪失した未来感に代わり、確かな現実感覚を。そこから先は、気がつけば?

「明るく、元気に、幸せづくり」

岡本　壮平（大阪事務所）

市民活動が広がりを見せています。「私の幸せ」と「みんなの幸せ」が結びつくようになってきたのかもしれません。まちづくりへの人々の熱意に誠実に、明るく元気に、みんなの幸せと私の幸せをつくっていきたい。

21世紀に向けて「共に生きる」10000日の生活価値観

尾関　利勝（名古屋事務所）

私が新世紀を生きるのは元気であれば凡そ10000日。生命の終幕に向かう転換期を迎え、個が主張され過ぎる我が儘時代に対して、共に生き、活かされるパートナーシップのライフスタイルを求め続けていきたい。

21世紀に向けて

馬詰　建（大阪事務所）

都市計画という仕事は社会やまちを良くするということに関われる仕事だと思うのですが、そのような実感は少ないということと、日々のなかで本当にそのような視点で仕事に取り組んでいるかということを思います。

秘するが花

尾澤　律子（京都事務所）

「・・・

近況

笠松　明男（京都事務所）

最近、木に凝っています。あと10年ほどすると国産材が大量に伐採の時期になります。でも、円安の影響もあり、市場の8割は外材となっています。日本の森を守るため良質の木を使っていく方法を考えてみませんか。

気候風土に根付いてきたバナキュラーを目指して

小林　佑造（東京事務所）

今は、哲学と心づかいが希薄になってきています。福祉の原点とは“近隣の人たちに対して自分に何ができるかを自らに問いかけることから始まる”ですが、これをものづくりの基本としていこうと思います。

数年前から野菜を作っています

坂本　一秋（大阪事務所）

やっと食べられるものができるようになりましたが、まずくてたまりません。かみさんに「作る人に似るのよね」と笑われています。美味しいとは言えなくてもせめて普通に食べられるものを作りたいと思っています。

「地球」って誰が命名したんでしょう？

高坂　憲治（大阪事務所）

10年間、中山間地域、過疎地などと呼ばれる地域に通って、都市って何だろうと思う。人が多いことのみに起因するすべての事象が構成する社会空間？ならば、人が分散すれば都市問題は解決する?！でもその先には何があるだろう。

闘うプランナー

坂井　信行（大阪事務所）

決して設計できない「都市」をフィールドに選んだ時、終わることのない「計画」づくりに奮闘する私の日常は始まりました。不確かな時代の中で計画の拠り所をどこに求めるのか。試行錯誤の闘いが続きます。

「急がず、ゆったりと」

島津　史子（京都事務所）

年々、あっという間に過ぎてゆく日々。これからも繰り返し同じことを思っているのでしょう。それだけではもったいないので、新鮮な空気を入れて、少しずつ模様替えをしていきたいと思っています。

まちづくり・むらおこしに想うこと

田口　智弘（大阪事務所）

利便性と利益の享受だけでなく、譲り合いと助け合いがまちづくり・村おこしに重要なファクター、あとはVFMとSWのプランがあれば、しばらくは持続的に発展していくと思うのですが...。

‘まちづくりびと’をめざして

田中　祥文（名古屋事務所）

私は今、まちづくりの仕事をしています。時間とともに人が育ち、ものごとが進んでいくことに、単なるものづくりとは異なる醍醐味と不思議さを感じています。これからもいろいろな‘まち’とめぐり会いたいものです。

「色んな事にチャレンジ」

西田　昌治（京都事務所）

今までの主な仕事は、宅地開発や公園計画等の基本構想から実施設計までの物づくりが中心でしたが、今後は地域密着型（ワークショップ等の地元参加型など）の展開による物造り等をしていきたいと考えています。

幅広く、柔軟に、冷静で（こうありたい）

田中　一衛（名古屋事務所）

名古屋事務所に入社してから、9年が経とうとしています。特に今年は、市街地整備計画等から産業振興施策関係へと、業務分野の大きな転換がありました。初心に帰る気持ちで、取り組んでいきたいと思っています。

地球をデザインするぼく

中川　天晃（大阪事務所）

「専門は何ですか？」と聞かれると「造園、土木設計です」と答えるようにしていますがこの答えには満足していません。「造園設計です！」と言いきれる自分のポジションづくりに焦りを感じる今日この頃です。21世紀に向けて「地球をデザインしています」と言える自分を目指します。

「本質とパーソナリティの環境屋」

畑中　直樹（大阪事務所）

ここ十数年の間にも目まぐるしく変化する「環境」の分野で、トレンドに流されない本質を見据えたアプローチを心懸けたいと思います。また、本質部分で地道に頑張っている無欲な人々を、少しでも応援できればと考えています。

まちづくりの免疫系を構築します

馬場　正哲（大阪事務所）

先月、自宅町内自治会が地縁団体の法人認可を受けました。安心コミュニティプラザの所有に対応してですが、官でも民でもない地域や市民（第３アクター）の主体形成と創造的活動が時代をリードするそんな予感がします。

『みんなの夢を実現できるコンサルタント！？』

藤　省三（京都事務所）

調査計画･設計･事業化と一連の流れについてトータルにコーディネイトでき、かつある分野にこだわりを持ったスペシャリストとしての力量を備えた自立したコンサルタントになっていきたい。また、21世紀は「夢を持てるまち」をめざしみんなの夢が実現できるまちづくりに取り組んでいきたいと思う。

抱負

藤井　明美（大阪事務所）

今までノンビリと気楽に過ごしてきた様な気がする。そろそろ本気出して頑張ろう！仕事でもプライベートでもできるだけ多くの人と関わるようにし、不得意な事にもトライし、今よりももっと成長したいと思う。21世紀までに少し自分を変えたいとも思う。

21世紀に向けて

早川　周（名古屋事務所）

幼き日、遠く輝く未来であった21世紀が現実になった時、更なる未来の姿は混沌としている。「人間であることは旅人でもある。そしてその旅はどこへ続くかと、それを問いかけることが人生の意味であろう」（J・ヒルシュマイヤー）

情智ともに備わる人でありたい・・球体人

福井　守（名古屋事務所）

「私の想い」。人の生きる姿に最終形はない。自分が描く虚像への到達感は勘違いであり、それは次への通過点でしかない。人に夢･欲･無意識がある限り、この愉快な迷走は永遠に続く。また、人の生きる‘まち’にも最終章はない。

「ニュースレター101号」

堀口　浩司（大阪事務所）

我々は委託者を相手にしつつ、その裏にいる市民を真の委託者としている。住民投票や市民参加等、間接から直接へ、一方通行から双方向へと政策立案の方法も変わりつつある。ニュースレターを長らく購読ありがとうございました。

21世紀は初心にかえって再出発

松尾　高志（京都事務所）

永い間関わっていた山科駅前地区の市街地再開発事業(ラクト山科)が完成し、20世紀に大きな区切りをつけることができました。21世紀は、初心にかえって、新しいまちづくりに取り組んでいきたいと考えています。

すてきな人生ですか

桃薗　和徳（東京事務所）

酒は百薬の長と言われていますが、私にとっては命の水とでも言えましょうか。いい酒は、呑むほどに味わい深いものです。仕事や趣味もこの様にありたいものです。

「より良い計画技術へのアプローチ」

山田　克雄（京都事務所）

単なるコンセンサスづくりに偏っていないか、自問しています。実践計画はさまざまな要素の調整により可能になりますが、長い期間にわたって妥当な都市・地方計画を支えるより良い計画技術へのアプローチを探っていければと思っています。

まごころで高次的楽譜を創生

松木　一恭（京都事務所）

幼い頃からモノづくりに興味をいだき、リズムある生活空間と建築を観てきました。これからも他人でなく自己競争により新しい楽譜＝技術を現場から発見し、より高次的な楽譜＝生活が豊かに築ける仕組みをまごころで構築し、生物の笑顔を観たいと思います。

とは言え体力勝負、しっかり食事を！

山下　宏（名古屋事務所）

テクニカルハラスメントという言葉もあるようですが、書類という紙情報に埋もれる日々から抜け出し、情報化にも乗り遅れず、世紀を乗り越えて行きたいと、今のところまだまだ20世紀人の私は思っています。

「存在の理由は･･･？」

吉田　久視子（大阪事務所）

たとえくるしいときがあっても、幸せを感じられる一瞬があればいい。そんな気がします。こうやって、いま私がココにいる理由。必然か偶然かそれはまだ分からないけど、「幸せ」を感じながら仕事をしていきたいです。

東京事務所が移転しました
〔東京事務所長／小林　佑造〕

事務所の前にある新宿御苑は桜も終わり、新緑の装いをし始め気持ちの良い風を送ってくれています。平成２年にここに来て10年近くが経ちましたが５月１日に事務所を移転することになりました。

移転の地は現事務所からひと駅先の四谷三丁目で駅から徒歩３分程にあります。近くにはお岩稲荷や銀座の奥座敷である荒木町もあり、タクシーの運転手さんによれば銀座に次いで今、流行っている場所とのことです。

隣接した地域は、現在共同建替事業のお手伝いをしている地域です。ふりかえってみると開設後10年経ち、教育文化・施設、市街地整備、地域福祉、総計、住宅計画、再開発、施設設計などの業務分野について、多くの皆様との信頼関係を大切にし築くことに努めてきましたが、これからも移転先の若葉という地名に負けないよう、新鮮な気持ちでまちづくりに取り組んでまいりますので、これまでにもまして暖かいご支持・ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。また、お近くにおいでの際には是非お立ち寄りください（電話･FAX番号は変わりません）。

新住所：〒160-0011
東京都新宿区若葉1-1　YTビル2F
TEL　03-(3226)-9130
FAX　03-(3226)-9560

編集後記

ニュースレターは変わります！

本号から誌面のデザイン・レイアウト、コラム名などを変更しイメージチェンジを図っています。これからも所員の手づくりの編集を大切にしながらより充実した内容でニュースとレターをお届けしたいと考えております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ご意見をお待ちしています。

営団地下鉄丸の内線四谷三丁目駅下車　徒歩３分
都営地下鉄曙橋駅下車　徒歩６分　ＪＲ・営団地下鉄四谷駅下車　徒歩10分

紹介者／京都事務所　石井　努

「手仕事の日本」

◎柳宗悦著
◎岩波文庫

この本は、日本各地に残されている手仕事によってつくられた工芸品を、筆者の目で選び紹介した本である。選ばれた品は「正しい美しさ」をもっているもので、郷土的な実用品となっている。

「正しい美しさ」とはどのように生み出されるのか？正直な気持ちや誇りをもった職人による仕事、実用と結びついた美、一番自然な状態である健康な性質で単純さと結びつくもの、といったことが記されている。また、あとがきには「若い人にこれまで知られていない日本の一面を知らせようとする」とある。出版当時の若い人が、今いくつになっているのか考えてしまい、今この本を読んでいる自分がいくつなのか、時代の流れとともにそのギャップについても考えてしまうのである。

この本が記された昭和20年頃と大きく生活が変わり、空調のついたコンクリートの建物の中で過ごす時間が多くなった我々にとって、自然や歴史のリズムに基づいた生活から生み出された道具について考えることはとても難しいことではないだろうか。

そして、時に「これはよい」と感覚的に感じても、果たしてその感覚がどこまでそのものの本質をとらえているのか甚だ疑問、というより、自らの立つ位置さえ定まらない自分にとっては、無重力状態の中にあり、ものをつかむどころか、ものをゆっくり見つめることもできない。そんな生活を送っている状態で生まれる「これはよい」と感じる感覚をどこまで信用してよいものだろうか。考えれば考えるほど絶望的になってしまう。

ただ、紹介された品やそれに近い品についてふれていくことはできるはずである。その出会いは、今となっては、実用面だけで難しいかもしれないが、昔の若い人向けに記されたこの本や、自分の心許ない感覚を頼りに、「正しく美しいもの」に近づいてみたいと思ってしまうのである。それには、まず衣・食・住の中で、気軽に実用に供する品で、「美しい」と感じるものを実際に試してみることが必要だろう。たとえ出来合いの弁当やカップ麺を食べることがあろうとも、「正しく美しいもの」に近づきたいという気持ちを心の隅にとどめたい。そう感じながら日常を暮らしている人も少なくないのではないか。

この本は、取り上げた品について、やわらかい口調で絶賛の言葉を発したかと思うと、反面超辛口の批評もあり、日本の文化のあるべき姿をも伝えようとする気持ちさえ読んでとれる。また、「正しく美しい」物が挿し絵としてふんだんに掲載されており、絵を見るだけで楽しくなってしまう。また、地域別にまとめる形式にもなっており、馴染みの地域にどんなものがあるのか、自分の故郷にはどんなものがあるのか再認識する意味で一読するのも意義があるのではないだろうか。

まちかど

蒲郡で見つけたリサイクル建築

～そこはメルヘンの隠里だった！～

／名古屋事務所街角探偵団

アメリカズカップ、ニッポンチャレンジ号の基地・蒲郡は三河湾に面した温泉郷のある宿泊観光地です。人口約８万人の風光明媚な住宅・観光・地場産業都市で、温室蜜柑や水産加工品、日本一の繊維ロープが地場産品として有名です。この町も他の温泉観光地と同様に入り込み客減少に苦戦。このため海洋リゾート「ラグーナ」を建設中の他、ニッポンチャレンジ基地のある蒲郡港付近では海洋情報センター「生命の科学館」が開館しています。この隣接地が私達がお手伝いしている蒲郡駅南再開発地区で、まちの再生に向けて地元・市の共同でまちづくりを進めています。

まちづくりのために市内巡りをしている途中で面白い事例を発見しました。

形原温泉街の奥に不思議な階段があり、登り口左手は陶器ギャラリー(写真①)、右手は小さな喫茶店(写真②)です。何か惹かれるものを感じながら階段を上り詰めると、染め物主体の工芸店(写真③)があり、中は斜路と登り天井で店舗と一体になった風変わりな藍染工房でご婦人達が作業をしています。早速店員さんにヒアリングをして謎が解けました。

ここは、山頂へのハイウェー完成後に廃止されたロープウェーの駅を、店から少し坂を登った林の中に展開するジンギスカン料理店経営者の発想で再利用したリサイクル建築だったのです。オルセー駅ではありませんが無用の交通施設がクラフト工房に変わる例として注目されます。階段の登り口にあった可愛らしい喫茶店は元ロープウェーの切符売場でした。ちなみにこの喫茶店と陶芸ギャラリー、隣接する詩と絵本のギャラリーは、系列店を京都・哲学の道、東京・原宿にも持つ作家グループが運営しています。図らずも無粋な男３人が意外な穴場発見のうれしさに浸り、メルヘンを楽しむカップルを後目にカレーとコーヒーを頂いてきました。こういう発見があるから町の探検はやめられません。

写真上から：写真①、写真②

写真③

アルパック (株)地域計画建築研究所

・本　　社
・京都事務所　〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
・大阪事務所　〒540-0001 大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
・名古屋事務所〒460-0008 名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
・東京事務所　〒160-0022 東京都新宿区若葉1-1・YTビル2F/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
・九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673